



博士論文概要書

指導教授 千葉文夫教授

題目 ジョルジュ・バタイユ 供犠のヴィジョン

早稲田大学大学院文学研究科フランス文学専攻

氏名 古永真一

博士論文概要書

ジョルジュ・バタイユ 供犠のヴィジョン

古永真一

ジョルジュ・バタイユの猥雑とも言えるほどに豊饒なる著作を考察する際にはいくつかのアプローチが考えられるであろう。さしあたって作品や年代を限定して論じる方法と時系列に沿ってバタイユの思想の変遷を辿る方法と二つに大別することができる。前者は一つの主題を深く掘り下げることができるが、ともすると細部に拘泥するあまりに本筋から逸脱する危険性があり、扱う著作が限定されることからバタイユ思想の総体には迫ることは難しい。後者は、様々な著作を順々に取り上げることでバタイユ思想の総体を浮かび上がらせることができるが、バタイユの奔放な言語活動に翻弄されてしまったり、そうした迷走を避けるために表面的な説明に終わる危険性がある。それぞれ一長一短があるが、本稿では原則的には時系列に沿いながら一つの主題を多角的に考察するアプローチをとっている。このような方法を選択したのは、「供犠」(sacrifice)という主題がバタイユの著作において底流をなすと共に一つの観点からでは収まりきれない広がりがあるからである。供犠という視点からバタイユの言語活動を定点観測してゆくと、バタイユが供犠という儀礼に単なる知的な興味を越えた思いを抱いたことがわかる。供犠への強迫観念とも言える強い魅惑の念は、あるときは絵画や写真のような目に見える対象に投影されることもあれば、哲学的な主題として考察されることもある。また文学作品が放つポエジーというものに比せられて論じられることもある。ジャンルを越境侵犯するバタイユの言語活動を考慮すれば、このような多方向への逸脱は当然のことである。

このように供犠という主題からバタイユ思想を探ってゆくと、彼が絵画や哲学、文学のみならずエロティシズムや神秘体験に関心を持っていたことも理解できるのではないだろうか？ 供犠とは、共同体において生け贄が劇的に破壊される儀礼であり、生の源泉たる宗教的なパトスが噴出する恍惚の体験である。供犠という「蛮行」を理性的に克服したと言っても、人間は孤絶した倦怠を疎い、コミュニケーションや濃密な生を求めてやまないことには変わりはない。本稿では、このような「人間的」な欲望が奥底において破壊や殺戮へと駆り立てられるまがまがしい衝動と結びつくことをバタイユは供犠に見ていたという立場から、こうした「呪われた」存在論的過剰がどのように人間を突き動かし、消尽へと駆り立てているのか、またバタイユがこうした事態に対してどのように考えていたのかを論じるものである。

第一章では供犠的なパトスをもったイメージとバタイユの思考の関係について論じたいと思うが、それはバタイユが供犠に対してデータを集めて様々な学説を付き合わせて論を展開するだけでなく、供犠的なイメージを感得する体験の言語化とその体験がいかなる射程を孕んでいるか思考するからである。供犠は、社会的儀礼という社会学や民族誌の研究対象だけでなく、破壊や引き裂きという強度の情動を喚起するが、バタイユはそのような情動に立脚する思考の可能性を模索していたと思われる。第一章は供犠の持つ破壊的なイメージとそのパトスに魅せられるバタイユがどのような供犠の思考を企てていたのかを「供犠と情動的思考」という主題のもとに論じてみたい。

次に供犠という主題をめぐってバタイユがどのように自らの思考を練り上げていったのかを「供犠と共有的認識」として考察したいと思う。バタイユの思想を考える上ではヘーゲルの存在は無視することができないが、前述したようにヘーゲルにも供犠のヴィジョンがある以上、バタイユはそれに対抗しうるヴィジョンを提示しようとしたはずである。本稿では、「内的体験」よりも「共有的認識」や「至高性」に重点を置きたいと考えている。バタイユと言うと「内的体験」と言うくらいに「内的体験」という言葉は、バタイユのイメージとして定着した感があるが、逆に言えばそこまでバタイユ像が固着してしまったということを意味している。だからと言って「至高性」を重視すればバタイユの「神秘性」が払拭されるわけではないが、「至高性」にはバタイユの思想を包括し、総合する度合いが「内的体験」より高いように思われる。また供犠という儀礼が持つ歴史性を鑑みるならば、古代の王と至高なる者との類縁を示す「至高性」の方が本稿の趣旨からしても適切である。また「共有的認識」は、「有用性の限界」の補遺の部分に埋もれていたためにこれまでバタイユを論じる中で蔑ろにされてきた用語であるが、ナンシーやブランショが考察したようなコミュニケーションや共同体といった主題にも通底し、従来のバタイユ像を刷新する可能性を秘めている。共有的認識を哲学的に洗練された言説による共同体の思考へとずらす前にそれが情動的な思考であるということに立ちかえることによって供犠と笑いを共有的認識として同列に並べたバタイユの意図が見えてくるのだ。また情動的思考とは情動に溺れこむ非理性的な体験の単なる礼賛ではなく、能うるかぎり明晰に情動が意識の消失点へと運び去るモメントを認識しようとするのだとすれば、バタイユを神秘主義者だとする批判に対しても有効であろう。

最後にバタイユが文学に対してどのようなヴィジョンを持っていたのかを「供犠としての詩」という側面から考えてみたい。バタイユの思想を「哲学」としてのみ扱うことは、バタイユの持つ猥雑な魅力を哲学史のなかに埋葬してしまう危険がある。バタイユは一貫した哲学の体系を自らの思想として構築しようとはしていない。したがって、バタイユの思想や文学を何らかの思考体系へと「止揚」したり「昇華」することは避けなければならない。そのためにはバタイユの思想だけでなくバタイユが供犠の後継と位置づける「文学」にも強い関心を示していたということに注目したい(本稿ではバタイユの個々の小説の分析は行わないが、それはバタイユの小説作品の価値が低いからということではなく、小説にはそれにふさわしいアプローチが必要であると考えたからであり、またバタイユの供犠のヴィジョンという骨子が個々の作品分析へと拡散する可能性があるためにあえて取り上げないことにした)。戦前にはシュルレアリスムに対して詩批判を激しく展開していたバタイユだが、戦後になって詩ということを言い出したのはなぜなのか? バタイユは「転向」したのだろうか? 謎を解く鍵は、バタイユが供犠をどう捉えていたにかかっている。